コンダクター

谷之雄二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コンダクター

【Ｎコード】
Ｎ６３１９Ｑ

【作者名】
谷之雄二

【あらすじ】
俺の名前はネッド・ベネッセ。魔術教会から追放されて、どこにあるかも知れない？あるもの？を探し、傭兵家業なんかをやっている。そうして、そんな俺がたどり着いたのは辺境の町トラバスタ。ここにある有数な資産家ダズベリーの屋敷に、そのブツはあるらしい。情報屋のオーリーの助けを得て、屋敷に潜り込んだまでは良かったが――そこで、俺は奴と出会った。

プロローグ

時が止まったかのような静寂が、そこにあった。
空気はピンと張り詰め、喉は渇ききってしまっている。動くものは、窓の隙間から忍びこむ風によってはためくカーテン。そして、ナイフから滴る真っ赤な血だけであった。
少年の瞳は、血をしたためた白銀のナイフを握る親友を見つめていた。
「……」
唇は言葉を発せない。
目の前の現実が信じられず、少年の身体は自然と震えていた。
ナイフを握った親友の目の前で、床に倒れているのは女性だった。もはやピクリとも動かず、床に広がるのは刻々とあふれ出す血液である。
――死。
驚愕、疑問、そして恐怖さえもが、少年の心を襲った。背中、手、額……冷えた汗が少年から滲む。頭は目の前の光景を理解することを拒んでいるが、身体はそうはいかないようだ。
目の前のそれは何を意味しているのか。
確実なことは一つあった。大切な人の死が――少年の前に忽然としてあるということだ。
「やあ……ネッド」
カーテンの隙間から風が差しこんだ。
わずかに漏れてくる月明かりが照らした親友の顔は、とても幸せそうだった。衣服や頬にあびている返り血が、その幸せそうな表情の不気味さを物語る。
なんだ？　見たこともない親友の表情に、少年――ネッドは言いようのない恐怖を覚えた。なにより彼が信じられなかったのは、親友の声が自分の知っている声ではなかったということだった。

曇ったガラスを通しているかのよう、不気味な響きを帯びていた。ネッドの知る限り、少年の声は美しく透き通った声のはずだった。
そんな記憶の中の声と、この少年の声は、全く別人といってもいいぐらい、異なった響きをしていた。
「どうしたんだよ、ネッド。……入って来いよ」
親友は、笑みを崩すことなく言った。
両手を軽く広げ、ネッドを迎えている。さながら、舞台に立つ役者のような身振りだった。
この光景が理解出来ない。薄暗い部屋の中にあれば、そんなネッドの心情は不気味さを増した。
「なんだよ……これ……？」
ようやく、絞りだした声で問いかける。
しかし目の前のそいつは、質問の意味を図りかねるようにきょとんとした顔でネッドに返答した。
「なにって、アイネだよ。我が師であり我が母でもある、偉大なるコンダクター、アイネ・クライネさ」
そう……アイネ。
ネッドは、信じたくなかったそれが確かにアイネであると告げられた。親友が見下ろす女性は、血を流している。
「これでもうコンダクターはいない。僕こそが、いや、僕らこそがコンダクターだよ、ネッド。分かるかい？　この僕らがたった今、コンダクターになったんだ」
分かりたくもない。
アイネは、ネッドにとって全てであった。道であり、光であった。かけがえのない存在だったのだ。それを、こいつは無に返したのだ。何もかも、消し去った。
憎悪に満ちた怒りが、ネッドの心を支配していた。それに気づいているか、いないか。少年は月明かりを背に受け、神託でも唱えるかのように告げた。
「アイネという楔は外れ、そして僕は自由になった。君もだ、ネッ

ド。君を縛るものも、もうない。僕たちはついにコンダクターになったんだ。これは素晴らしいことなんだぜ？」
ネッドは打ち震える身体を隠すように俯きながらも、親友の言葉を一言たりとも聞き逃さなかった。この、彼女を殺した親友。いや――悪魔の言葉を、脳裏に刻んでおこうとしたのである。
「それで……彼女を殺したのか……」
ネッドの口から漏れた声に、親友は目を丸くした。
「ああ……そうだけど……？」
何を言っているのか、とでも言いたげだ。全く、彼は意に介してすらいないのだ。ネッドの持ち上げた瞳が、目の前の少年を睨みつけた。
「お前は……お前は……！」
ネッドには、今の自分の顔がどんなものになっているのか想像はつかない。しかし、感情は怒りと憎しみで高ぶり、殺したいほどの殺意を持っていた。
親友であった少年の表情が、感嘆に変化した。
「へえ……お前ってそんな顔もできたんだな。……けど、気に喰わないって感じだな。彼女を殺したことが、そんなにムカつくか？」
「当たり前だろ……！」
「そっか……」
少年はそれまで血の雫を落としていたナイフをふらっと持ち上げると、それを軽やかに回転させた。考え事をするような表情は、すぐに呆れへと変わった。
「なら、別にいいや」
「なに……？」
憎悪の表情ながらも眉をひそめたネッドに、少年はため息をこぼした。
「お前に期待した僕が馬鹿だった。別にまあ……コンダクターは僕だけでいいよ」
肩をすくめて少年は言った。大した問題でもなさそうに。

「それより彼女……このままでいいのか？」
少年はそう言うと、アイネへと目をやった。
はっとなって、ネッドは急いで少年の横を走り過ぎ、彼女に駆け寄っていった。少年への怒りで我を見失っていた自分を叱責する。
だが、彼女を抱えると、その身体はすでに酷く冷たくなっていた。寒気すら覚えるほどに、人の体温が感じられない。そう――これは死体だ。すでに、事切れている。
彼女の唇は、もう開かない。彼女の瞳は、もう優しい色で自分を見つめてはくれない。彼女の灯火は、既に消え失せていたのだ。彼女の笑顔は、もう――。
「われ奏でるは、さすらう若者の歌」
少年の歌うような詠唱が、背後から聞こえた。
移送魔術……！　とっさに振り返ったとき、少年の身体はすでに床から広がる光に包まれていた。
「まて……！」
とっさに手を伸ばして、ネッドは少年を捕まえようとした。
光に包まれたままの少年は、彼を見つめ返す。
「じゃあな、ネッド」
最後にネッドが見た少年の顔は、歪んだオブジェのような表情だった。
光が中心に集まりながら消えていく。光が消えると、その分だけ少年の肉体も消えていき、やがて――手は何もない宙を掴むのみだった。
それまで……そこにいたはずの少年はもういない。あとに残されたのは、ネッドと、そして冷たくなったアイネだけ。
くずおれたネッドの頬を、雫が流れた。次々とあふれてくる雫は、やがて線となって、唇にその味を伝えてくる。
一体、どれだけの時が流れたのかは分からない。長くもあるようで、短くも感じられたその時間に、ネッドは涙した。
抱きかかえる彼女の頬にも、ネッドの涙はぽとりと落ちる。のど

を鳴らす嗚咽のみが、月明かりの差す部屋に響いていた。
ネッドは立ち上がった。
もう二度と動くことのない彼女の身体を抱えて、彼は天を仰いだ。
そこにあったのは天井であったが、彼の瞳は、その先にある虚空の彼方を見えているようだった。
そう――あの、親友であった少年がいるはずであろう先を。
そして。
「ヴェイイイクウウウウゥゥ！」
天に向かって――ネッドは高らかに吼えた。

01

――気づけば、ネッドの目の前には天井が広がっていた。
木材で出来た、なんてことのない天井。それまでの薄暗い部屋とはうって変わって、太陽の暖かな陽が差し込んで、陽気を生んでいる。外から聞こえてくるのは、小鳥のさえずる軽やかな鳴き声だ。
「……そう、か」
ネッドはぽつりと呟くと、シーツをどけて上半身を起こした。
寝起きだからか、懐かしい夢を見たからか。頭はぼんやりとして、脳が働き出すのに時間がかかりそうだった。
ようやく思考が回転し始めると、自分がいる部屋の内装が目に入った。
なんてことのない部屋だった。ところどころ傷が目立って年季が入っていることを思わせるが、いたってシンプルな宿屋の一室だ。ナチュラルな木製の壁やタンスにテーブル。だがむしろそれゆえに、余計なもののない洗練化された部屋は、宿泊客にとって心安らぐ空間でもあるのだろう。
ネッドは伸びをして身体をほぐしはじめる。すると、扉の向こうから階段を駆け上がってくる足音が聞こえた。
「アニキー、おはよー！　起きてる？」
ガチャっと扉を開け放ったのは、一人の少年だった。刈り上げた髪型と小柄な身体、それにどこか生意気な表情があいまって、悪戯なサルのような印象を受ける少年だ。
ネッドは寝起きの自分とは違って元気に満ちている少年に半ば呆れるような目を向けた。
「……朝っぱらから元気だな、オーリー」
「へへ……まあね。それより、朝報朗報」
「朗報？」
ネッドは着替えながらオーリーの声に耳を傾けていた。壁の出っ

張りにかけてあったシャツと上着に袖を通し、テーブルの上に置いてあったペンダントを首にかける。ネッドの背中に、オーリーは言葉を続けた。
「そうそう。斡旋所のほうにさ、要望してた仕事が入ってきたって話なんだ」
「……！？」
ネッドは一瞬はっと目を見開いて、振り返った。
「ほんとか？」
「ああ、ホントホント。だからこうしてアニキを呼びに来たってわけ」
「……」
ようやく舞い込んできたか。
待ち望んでいた時が来て、ネッドは心なしか唇の端を持ち上げていた。慎重に待ち続けたかいがあるというものだ。あとは、その仕事の内容次第か。
「……よし、じゃあ今日はその仕事を確認しにいくか」
「おっけー……あ、でもアニキ、その前にさ」
突然、出発に気を入れなおしたネッドに向けて、オーリーがにかっと笑みを浮かべた。この表情には見覚えがある。このトラバスタの街にやって来て彼と知り合ってから2ヶ月……幾度となく見てきた表情だ。
ネッドは怪訝そうに声を漏らした。
「……なんだ？」
「なんだ？　じゃなくてさー……いい加減に魔術を何か教えてくれよっ」
「またその話か……」
ネッドはため息をついた。
2ヶ月前に初めてトラバスタの街にやってきたネッドにとって、街の散策は手探りで始めるようなものであった。まして仕事の斡旋所の関係からすれば、数々の情報収集や友好関係を一から築くのは

時間がかかる作業である。
　そんな中、ネッドがこうして宿を得てトラバスタで活動できるのはひとえに目の前のこの少年――オーリー・キャンベルと知り合ったからに他ならなかった。トラバスタで情報屋として働いていた彼と知り合ったことで、さまざまな作業はすんなりと上手くいった。おそらく、彼の助力がなければ時間と労力はもっと余計にかかっていたことだろう。
　その点に関しては、ネッドも彼を評価しているし、信頼もしている。無論、感謝もだ。だが……一つネッドにとって彼に対する彼に難点があるとすれば、それはこの魔術への興味と好奇心だった。
「……言ったろ？　そんなに魔術が習いたけりゃ、専用の機関にでも入って教えてもらえ。俺が教えたところで、大した魔術も使えねえよ」
「そんなことないって。だって……アニキはあの魔術教会の中でも指折りの大聖堂の出身じゃん。一流魔術師なんだぜ？　……まあ、今はなんか追放されてるみたいだけど」
「……」
　仮に魔術師に一流や二流があるとすれば、確かにネッドは一流かもしれなかった。
　大聖堂は魔術教会の代表的な魔術師の卵を育てる育成機関だ。知名度、という点で言うならば、大聖堂の名は少なくともこのルーベルグ大陸中には知れ渡っているはずである。
　ただ――大聖堂から追放されている今、それが何になろうか、とネッドは思わざるえなかったが。
　めんどくさそうな顔をするネッドに、オーリーは続けて言った。
「それに、ちゃーんと約束したじゃないか」
「約束？」
　まるで思い至らない顔になるネッド。すると、オーリーはごそごそと何か紙らしきものを取り出し、それをバッと開くと、自慢げにネッドに向けてひらひらと見せびらかした。

「ほら、ここに契約書も」
「げ……な、なんだそりゃ。いつの間にそんなもん……」
「へへー。アニキがこないだの仕事で酔っ払ったときにちょちょいっとね。相変わらずお酒には弱いねぇ」
「……」
してやられた。
通りでこないだの仕事で記憶が曖昧だったはずである。お酒を飲んだせいで、頭が色々と吹っ飛んでしまっていたのだろう。
ニヤニヤとしてだまして書かせた契約書をひらつかせるオーリー。しばしネッドは固まっていたが、やがて諦めたようにため息をついた。
「しょうがねぇな……」
「え、ほんとアニキっ！？」
「ああ、一つだけ教えてやるよ。じゃあ、まずは――」
言葉を切ると、ネッドはオーリーに向けて三本の指を束にして突き出した。まるで銃でも模したかのような構えだ。ネッドの唇が、ささやくように開かれる。
「奏でよ……」
すると、ネッドの周りから不思議な音色が聞こえてきた。指先に集まるのは余波を生み出す不思議な力である。力が空気中を動くたびに、まるで曲でも奏でるかのような不規則で、しかし明瞭たる音色が鳴る。
魔力だ。ネッドの体内と宙に在る見えざる力は、ネッドの指先に徐々に集まってゆく。音色のような音を鳴らしながら集まるそれは、次第に小さな弾と化してきた。あたりの空気が魔力によって揺れている。
もはや、嫌な予感しかしない。呆然となっていたオーリーは慌てて口を開いた。
「え、ちょ、ちょ……アニキっ――！？」
瞬間。

「魔弾の射手ッ！」
指先に集中していた魔力の弾は、一気にオーリーに向かって飛んだ。光となって飛んだそれは部屋の家具や絨毯さえも空圧で吹き飛ばし、オーリーの身体を貫いた。
「ぬあああああぁぁぁっ！？」
まだ威力がかなり抑えられていたから良かったのだろう。悲鳴と一緒に吹っ飛んだオーリーは、扉を破壊して向こう側の壁に激しくめり込むとようやく止まった。壊れた扉や壁の瓦礫が余韻を残す音を立てて崩れる中で、ネッドは上下反転状態で木屑の中に埋もれているオーリーに向かって言った。
「契約完了だな。んじゃ、斡旋所に行くか。用意しろオーリー」
「……こんなんアリかよ」
憔悴して呟いたオーリーの額に、軽い音を立てて木屑が落ちた。

01（後書き）

見切り発車で出発。

……後々後悔することになるでしょうか。

02

トラバスタの街の中心に相当する広場から、わずかに路地の奥へと向かった先――そこに仕事の斡旋所、いわゆるギルドと呼ばれる傭兵たちのたまり場が存在する。

なぜそのような場所に構えているのかということは、傭兵たちの性質からして明らかであろう。雇われの剣士や弓兵、魔術師たちは、ギルドを介して仕事をもらう以上、ある程度の秩序と規律を守ることが義務付けられるものの、その中には半端なゴロツキと変わらぬ者も少なくない。――街の中心で揉め事を起こされてはかなわないというわけだ。

来る者を拒まなければ、去る者も止めぬのがギルドのスタンスだ。仕事そのものに技量の有無が問われることはあれど、ギルドで仕事を請け負うこと自体に資格などは問われない。

そのためか――

「おい、待てよ」

不意に呼び止められて、ネッドは振り返った。すると、そこにいたのは二人組のいかにも人相の悪い男らであった。

ネッドに向けてギラついた睨みをきかせるのは、人の二倍は体格がありそうな巨漢の男だ。かたや、その後ろでニタニタと笑っているのは、骨に皮をべったりと貼り付けただけのような痩身の男だった。

「……なにか用か？」

「なにか用か……だと？　てめぇ、そっちからぶつかってきておいてよく言いやがるな」

「？」

分厚い唇を捲りあげた巨漢に対し、ネッドは怪訝そうに眉を寄せた。そういえば、確かに言われてみれば肩が誰かにぶつかった気がする。そもそもがギルド自体、お世辞にもでかいとはいえないほど

の広さである。……まあ、ぶつかることもたまにはあるだろう。
ネッドは気軽に苦笑いを浮かべながら謝った。
「そりゃあ、悪かったな。ま、許してくれ」
「……んだと？　その程度で許されるとほんとに思ってんのか？」
だが、それがいけなかったらしい。
ネッドの態度が癇に障った巨漢は、ギロリと彼を睨みつけた。いかにもこれからボコボコにしてやると言わんばかりの恫喝を含んだ瞳だ。そんじょそこらの優男であれば、恐怖に身をすくませても決しておかしくない。
しかし、ネッドはきょとんとして首をかしげた。
「……何か気に障ることでも言ったか？」
「てめ……ッ！」
怒りに顔を真っ赤にした巨漢の豪腕が、ネッドの顔をぶち抜く。
――だが、それは叶わなかった。
「なにっ！？」
「ったく、しつこいぜ……」
目の前からネッドが消えたことに男が驚愕の声を発したときには、すでにネッドは男の背後に回っていた。並みの傭兵でさえも捉えられるか定かでない、俊敏な動きだ。だが、それに振り返る隙さえもなく次の瞬間には、巨漢は足を引っ掛けられて盛大にすっ転んでいた。
「ぐっ！」
「お、おい、大丈夫か！？」
風船球のような巨体ごと、床に顔面を強打した仲間を気遣って、もう一人の痩せた男が膝を折る。もはや巨漢たちの怒りはネッドを一度殴りつけただけでは済まない心境に達していた。
「この……くそったれがあ――」
「やめておけ」
冷然な声がかかったのは、立ち上がった巨漢が獣の咆哮をあげてネッドに駆け出そうとしたそのときだった。背後からのその声に振

り返った巨漢は声の主を確認すると、戸惑うように唸って言葉を失っていた。
巨漢を制した声の主――一人の若者は、巨漢の前に進み出てネッドを一瞥した。腰に挿した剣と、よく身体になじんでいることを思わせる洗練された軽装の鎧。若者は、絶えず鋭い双眸をしていた。
「……手間をかけさせて悪かった」
ただ一言、それだけを告げると、若者は身を翻した。
「行くぞ」
「ぐ……」
若者に命じられ、巨漢と痩身の男は彼に仕方なさそうについてゆく。巨漢の漏らした声とその苦虫を噛み潰すような顔が、目の前の獲物をつぶしきれなかった悔しさを物語っていた。
そうしてネッドが連中が立ち去ったのを見送ると、それまでどこにいたのか、オーリーが駆け寄ってきた。
「ア、アニキ……一体何の騒ぎだよ？」
「なんてこともねぇよ。それより、受付は？」
「……あ、ああ、ばっちり」
それまで一足先に手続きをしていたオーリーは、戸惑いは隠せないもののとりあえず頷いた。ネッドは厄介ごとが去ったことにため息をついて、そのまま、騒ぎなどまるで日常茶飯事とても言わんばかりに落ち着いているギルドの受付に、どかっと座った。
既に予約済みということだったのだろうか。受付にいる屈強そうな男はそれに対しては何も言わず、代わりに呆れたため息をついた。
「……揉め事はかまわんが、建物に傷をつけるのだけは勘弁してくれよ」
図体に似合わぬ小さな丸眼鏡を押し上げて、ギルドの主人――リバウド・ニックスは忠告する。ネッドはそれに顔を歪めた。
「どうせ壊れたって修理代はこっち持ちだろ？」
「……当然な」
にやりとリバウドは笑った。

しかも、修繕費用に加えて賠償費まで払わされるときている。一度前に揉め事を起こしたときに支払った額は、どう考えても割に合わないものだった。……二度と厄介ごとはごめんだ。

ネッドは感心したように言った。

「まったく、足元をよく見てるな」

「経営者なんてものはそんなもんだ」

「……ところで、マスター」

リバウドをギルドの責任者としての通称で呼ぶと、ネッドは先ほどの厄介ごとを思い起こして尋ねた。

「あいつら……特にあの剣士……何者だ？　このへんじゃ見たことがない」

「ここ最近、この街にやってきた傭兵だ。といっても、仕事はまだ紹介したこともないし、俺もよくは知らないがな」

「……そうか」

きょとんとしているオーリーの横で、ネッドは何かを考えんでいるようだった。

気になるのは、あの瞳だった。まるで、こちらのことを知っているかのような覗き込む瞳の色。透き通るそれの奥では、こちらのことを伺っているような気がした。――無論、こちらの気のせいに過ぎないのかもしれないが。

「……まあ、お前が何を気にしてるかは知らんが」

黙りこんでしまったネッドの意識を呼び戻したのは、リバウドの声だった。

「とにかく、今回は仕事の紹介を貰いに来たんだろ？」

「おっと……そうだった」

ようやく、ネッドも意識を仕事の話へと戻す。

「確か、ダズベリー家での仕事を……ってことだったな」

リバウドはそう口にしながら、机の上の書類をめくっていった。目当てのものが見つかって、それをネッドたちの前に差し出す。

「報酬的には割りの良い仕事ではあるが……単発なうえに地下の地

味な仕事だからなぁ。あまり紹介できる奴も少なかった。まして、その割には募集資格はハードルが高い。請け負ってくれるっていうなら助かるが……」
「なんでもいいさ。とにかく、そこでの仕事が出来るならな」
ネッドは仕事の内容を簡単に確認すると、すぐにその書類にサインを記した。あとは、連絡を待って仕事に赴くだけだ。
「よし、オーリー帰るぞ」
「え、もう終わったのかよ？　ちゃんと内容は確認したの？」
背後で待っていたオーリーが不安げに聞くが、ネッドはそれを軽く流した。
「一応はな」
とはいえ……正直に言えば、そんなに詳しく見たわけでない。仕事の場所、そしていつ頃からの話か。それだけが分かればあとはどうとでもなる。重要なのは、ダズベリー家の仕事がようやく舞い込んできたということだ。
「おい、ネッド」
帰ろうと立ち上がったネッドの背中に、リバウドの声がかかった。振り返ると、彼は怪訝そうに眉をひそめていた。
「しかし、なんでまたダズベリー家なんだ？　何か理由でもあるのか？」
「ちょいと……忘れ物を、な」
ネッドは不敵に笑うと、オーリーとともにギルドを出て行った。
リバウドの眉は、彼の答えを聞いてもひそめられたままであった。

02（後書き）

被災地の方々の無事と復興をお祈り申し上げます。
いつか元の生活に戻れたとき、そのときにでもこの小説を読んでくだされば と……ただ書くことしかできない自分は、そう願います。

03

ダズベリー家はトラバスタでも有数の資産家の一族だった。トラバスタを管轄するここら一帯の領主にも負けず劣らない伝統と歴史をもつダズベリー家の格式は今日でも衰えることなく、現在も街の外れに豪華な屋敷が居を構えている。

いわゆる貴族たちに相当すると言われるが、あくまでもダズベリー家が資産家の一端であることは間違いない。片隅の地方に過ぎぬここトラバスタを含めて、ルーベルグ大陸に名を馳せる王国〈ブランドベル〉から子爵の爵位を授けられたダズベリー家はその発言権や威厳が広く拡大したのである。

爵位にしがみついて生きてきた、無駄な謹厳と飾りたくった豪奢に己の歴史だけを重んじる古臭い旧貴族たちとは別物だ。

ネッドはかつてダズベリーの現当主を見たことがあるが、印象だけで語るならばさすがに凄みを感じさせる男だった。しかし、そこには固定概念に囚われない自由なる生き様がにじみ出ていたようにも思う。あくまで――印象に過ぎぬが。

「着いたぜアニキ」

トラバスタの街の外れ。林を越えたそこには広大な屋敷がネッドたちを出迎えていた。屋敷を守る門だけでもそこらに生えた木をゆうに越している。そして門の向こうにはまるで害虫の一匹もいないだろうと思わせるほどの美しき中庭が広がっており、それを挟んだ玄関はかすんでいるかと思わせるほどだった。

ネッドは手綱を引いて馬を止めると着地し、先に門を見上げていたオーリーのもとに近づいた。そして同じように屋敷を見上げて感嘆の声をあげる。

「さすがに……でかいな」

「本当にこんなところで仕事？　俺、かたっくるしいの嫌だぜ？」

これから始まる仕事のことを考えて、オーリーは実に嫌そうな顔

をしていた。これだけの屋敷である。彼が不安を抱くのも理解に難くはなかった。
ネッドはそんなオーリーに安心感を抱かせるべく、微笑を返してやった。
「安心しろ。仕事って言っても地下の仕事だ。お前の思うようなことはないって」
「地下？　それって……」
仕事の内容は詳しく聞かされていなかったのだろう。オーリーはネッドに詳細を聞こうとした。すると、そのとき門の向こうから誰かが近づいてくる足音がした。
「何か声がすると思って来てみたのですが……もしや、あなた方が仕事を請け負ってくださった……？」
「え、ええ……」
ダズベリー家の主人だ。一度顔を見たことのあるネッドはすぐに分かった。
堀の深い顔立ちだが眼鏡をかけており、重鎮とした風貌と研究者のような繊細な雰囲気を併せ持ったダズベリー家の主人は、突然やって来た自分に戸惑うネッドたちへ柔和な笑みを浮かべてみせた。
「こんなところで立ち話もなんですな。仕事の話もしなければなりませんし……まずは中へどうぞ」
主人――オルベル・ダズベリーはそう言ってネッドたちを促した。
主人自らわざわざ門まで出迎えに来てくれたことには戸惑ったが、ある意味それもネッドの抱いた印象の表れなのかもしれない。いつの間にか近づいてきていた使用人たちに馬を預けて、ネッドはそんなことを思いながらオルベルの後を歩いていった。
中庭を通る道中、ネッドは仕事のさわりを聞く意味でもオルベルに会話していた。
「今回はこちらの仕事を受けていただいて、ありがとうございました」
「資格には魔術師ということが必須でしたが……」

「ええ……知っておられるかもしれませんが、なにぶん私は古き国家の研究者でして、その関係からか古代魔術についても色々と関わらせていただいておりますゆえ。ですから、その知識がある程度ある人でないと安心できないものでしてね」

オルベルは苦笑しながら説明した。

〈古き国家〉の時代、魔術は現代のものよりも遥かに優れた力であったと言われている。魔術国家ローファンが滅亡してからはその強大な魔術体系は崩れたとされており、その中でなんとか一体系を復興したのがネッドの操る奏言魔術である。だがそれでも、〈古き国家〉時代の魔術――いわゆる古代魔術には遠く及ばないとされている。

古代の時代を調べるためには魔術の研究はなくてはならないものだ。大方その関連だとは思っていたが、案の定かとネッドは思った。とはいえ、無論――大聖堂を追放されたことは伝えていない。ネッドにはどうしてもダズベリー家で仕事をしなくてはならない理由があったし、後ろめたい心はあるものの、魔術師としての能力は決してそんじょそこらの魔術師に劣っていないという自信もあった。

目的さえ果たせばそれでいい。とにかく、ここまできてはもう引き返す事も出来ないのだから。

「おや？」

オルベルがきょとんとした声をあげた。

立ち止まった彼の背中越しに玄関先を見やると、そこで憮然としたように仁王立ちしていたのは一人の少女だった。

顔だちは愛らしく、白乳混じりの鮮やかな金髪を後頭部で結い、肩を露にしたワンピース姿は、快活で健康的な美しさを感じさせた。しかし、そんな少女であるが、表情だけは不機嫌に唇を結んでこちらを見下ろしているのがネッドたちを戸惑わせた。

「そいつら、誰？」

ようやく唇が開いたものの、少女の口から飛び出たのはそんな一言だ。すると、少女を見つめていたオーリーはなにやら不思議なも

のでも見たかのように目を丸くした。
「あれ……どっかで見たような……」
頭の片隅でこびりついたそれを何とか掻きだそうとするものの、どうにも上手くいかずにオーリーは首を捻る。そんな彼の耳に、オルベルが驚いた声で少女の名前を呼ぶのが聞こえた。
「タラ、こんなところまで出てきて、一体どうしたんだ？」
そのとき――オーリーの頭の中に記憶が渦巻いた。逆流したそれは彼の幼少時代まで遡り、かつてある金髪の少女に思い切りぶん殴られていた記憶を思い起こさせた。そう、確かその少女の名も……。
「思い出したっ！　お前、あの暴力女――」
「ふんっ！」
次の瞬間。
突風のようなスピードでめり込んだ少女の拳がオーリーを殴り飛ばした。
「へぶ……ッ！」
思い出した記憶のままの懐かしい痛みに、オーリーは、やはりあの頃と全く同じく自分の運命を嘆きながら――気を失った。

03（後書き）

設定的に後から変更する箇所もあるかもしれない。
そんなことを思いながら行き当たりばったり執筆。
一応プロット的なものはあるんだけど……上手くはいかないものですね。

04

「いちっ……いたたた……」
消毒液を吸い込んだ綿の塊に傷跡をなでられて、オーリーは染みる痛みに表情をゆがめた。そんな彼の前に膝をつく女性は、心配した表情で彼に謝った。
「ごめんねぇ……うちの娘は相変わらず節操がなくて」
「なーにが節操がないよ」
目の前の女性――マメール・ダズベリーは慈悲深いマリアのような妻であったが、それに比べて、娘のタラは飼い主をわざわざ困らせる我侭な猫のようだ。威嚇して尖らせた口先が、滑らかに弁論を放つ。
「いきなり暴力女なんて言うほうが悪いんでしょ」
「そりゃあ悪いかとは思うが……だからっていきなり右ストレートぶちかますかっ！？」
マメールに治療される晴れた右頬を、オーリーは見せつける。まったく見事なものだと感嘆さえ覚えるような右ストレートは、頬から鼻梁にまで影響を及ぼしたようで、ティッシュが間抜けに二つの穴をふさいでいた。
「ったく、変わってないなぁ……」
「あんたこそね」
犬と猿のにらみ合いが続く険悪なムードだが、マメールは温かく見守ってほほ笑んでいるだけだった。どうやら、喧嘩するほど仲が良い、とでも思っているのだろうか。それにしては過激であるが。
「オーリー、具合はどう……ってなんだこりゃ」
次第にエスカレートしてきた二人のにらみ合いは虎と獅子に変化してきたようで、目に見えて唸りをあげている。オルベルとともに部屋に入ってきたネッドは呆れてそれを見下ろし、二人の間に割って入った。

「落ち着けってお前ら。むしろ……久しぶりの対面なんだから喜ぶべきだろう」
「こいつはただの腐れ縁よ。何が悲しくて喜ばないといけないのよ」
「へっ……そいつはこっちの台詞だ」
「なにをぉ……！」
「だから落ち着けって」
再び牙をむき出しにした動物たちの頭を押さえ込んで、ネッドはため息をついた。なんでも１０年以上ぶりの再会らしいが、オルベル曰くの話だと、当時もこのような雰囲気だったらしい。
振り返ってみると、オルベルもマメールもくすくすと笑って二人を見守っていた。久方ぶりの幼馴染たちの光景を楽しんでいるのだろうが、ネッドとしては再びオーリーが負傷するのは避けたいところだった。仕事もあることだしな。
ようやく二人が落ち着きを取り戻し、マメールが救急箱を棚に戻したところでネッドはオルベルに促されてソファに座った。隣にはオーリーもだ。
タラはふんと鼻息を立てると部屋を出て行った。真面目な空気を感じ取ったのだろう。なかなかどうして……ただの我侭なお嬢様ではない、か？
「さて、改めまして仕事の件ですが――」
オルベルが内容の説明を始めたところで、ネッドはすかさず思考をそちらに移した。

長年使われていたのかどうかさえ分からぬ朽ち果てた機材。壁に立ち並ぶ書物の数々は歴史から個人の記述書まで数多くを網羅しているように見えた。埃はかぶっているものの、一介の研究者が抱えるには貴重なこれらの書物や機材を前にしては、ネッドも感嘆を覚える。
興味本位で一冊の本を手に取ってみたが、面白い文献ではあるもののさほど希少価値の高いものとは思えなかった。数は多いが、ど

うやらその筋のルートを知っていれば手に入れられそうな代物だ。あるいは、高位交流を可能とする身分の者であれば。
書物を戻すとネッドは再び作業に戻った――ハタキ片手に埃を散らすという作業に。なるだけ埃を吸わないように、口には三角巾を巻くことを忘れてはいない。パタパタパタパタと脱力的な音だけが鳴り、もうもうと埃は散って床に落ちる。
「なあ、アニキ」
背中越しにオーリーの声が聞こえてきたが、ネッドは小さく返事を返すだけは振り返らなかった。姿は見えないが、少年の声がくぐもってないところを察するに三角巾は口元から下ろしてあるのだろう。
「なんで……なんで……」
そこまできてようやくネッドは彼を見た。
ハタキごと両の拳を握り締め、わなわなと震えている。俯いた顔からぶつぶつ呟かれる声は、どうやら不条理を嘆く声のようだ。
「なんで天下の魔術師とその仲間が……こんな陰気臭いところを掃除しないといけないんだあぁぁっ！」
やがて顔をバッと持ち上げた彼は、その不条理の全てを空に向かって吼えることで発散していた。
「魔術師が必要っていうから、どれだけ気合の入った仕事かと思ったら……ただの地下倉庫の掃除じゃないかっ！　こんなのってねえぇぇ！」
「我侭言うな。それに、こいつも立派な魔術師御用達の仕事だ。なにせここにあるのは魔術の組み込まれた機材や魔術体系を記した書物……その手の代物ばっかりだ。何かあったときのために、魔術師が常備して作業に当たるのが適当なんだろう」
「えー……魔術師ってそんな地味なもんなの？」
もはや作業の手も止めて、脱力したオーリーは落胆し、ネッドはそれに肩をすくめた。
「まあな。夢見るのは勝手だが、魔術師だって収入は必要だ。こう

いう仕事も案外必要とされてるんだよ」
「なるほどなぁ……」
オーリーは渋々とだが納得して頷いた。
彼に言ったとおり、これも魔術師の立派な仕事だ。それはもちろん、間違っていない。しかし――ネッドは、考え込むようにして辺りを見回した。確かにこれだけでも十分なほどの資料が揃っているが……ダズベリー家にしては安っぽいものではなかろうか？
「オーリー」
「んあ？」
いまだにぶつぶつと文句を言い続けていたオーリーを呼んで、ネッドはハタキを適当なテーブルに置いた。三角巾も引っ張るようにして外す。
「お前じゃないが……確かにこんなところにいる場合じゃなさそうだ。当初の目的を果たすぞ」
「あ、ああ……ちょ、ちょっと待ってくれよ！」
足早に倉庫を出るため階段を上っていったネッドを、遅れてオーリーが追ってくる。
「でも、目的を果たすのは良いんだけど……どうやって探すんだよ、アニキ」
「それはいま考えてるが……たぶん、別に地下室があるんじゃないかと思う。そこさえ探し出せれば……」
えてして魔術を介した道具や研究というものは、地下に隠されることが多い。誰にも知られぬようにするという意味もあるが、魔力というものが陰気な空気に触れることで増幅するという見解も残されているからである。ある種、魔力を湛える夜の闇に近いものが、地下にはあるのだろう。魔術に関する研究をするときは、地下のほうが反応が良いと言われているのだ。無論、そうでなくとも、音響や爆発の規模を抑えるなど、地下に作るメリットは多々あるが。
ネッドは階段を上って扉を開く。
と――その正面にいた少女を見つけて、思わず足を止めた。

「タラ……」
「どこに行くつもり？」
純真さを残した快活な少女は、ニヤリと悪戯げに笑ってネッドを仁王立ちで見下ろしていた。どうやら、話を聞いていたらしい。そしてしかも運の悪いことに、その話は彼女の好奇心という怖いもの知らずの心に触れてしまったようだ。
しばらく立ち尽くしたネッドとオーリー……やがて、彼は深く嘆息して答えた。
「分かった。秘密にしておくっていうなら……ついてきても構わない」
「やった！　さっすが、ネッド」
いつの間に名前を覚えたのか。それはともかく、親戚からプレゼントでももらったような笑顔でタラは喜んだ。タラがついてくることにはオーリーも不満げな顔だが、告げ口でもされては困るのは目に見えている。ある種の脅迫だが、所詮は少女のものだと思えば素直に従っておくのが妥当な判断だった。
それに――彼女ならば知っているかもしれない。
「じゃあ、早速だが一つ聞いてもいいか？」
「なになに？　なにか秘密の話？」
秘法や秘術にまつわる話に冒険――大方、そんなものが彼女の好奇心を刺激するものなのだろう。出来るだけ余計な情報を与えぬように、ネッドは話した。
「まあ、秘密っちゃあ秘密の代物だな。この屋敷の中に、魔力を秘めた古代の指輪……そんなものがあるって話は聞いたことがないか？」
「指輪？　さぁ、聞いたことはないけど……でど、お父様の宝庫にだったら、そういったものがあるかも知れないわね」
「宝庫？」
聞き返した彼に対して、タラは頷いて見せた。
「うん。なんでも、〈古き国家〉時代の貴重な道具や文献らを保管

してるって話。私も、魔術教会の人とお父様が話をしてるのをちらっと聞いただけなんだけど」
「魔術教会だと……？」
違和感が混じる話だった。確かにダズベリー家は〈古き国家〉の研究や調査を行っているが、それはあくまでも商人としての側面。つまりは資産運用の顔の一つでしかないはずだ。より深く根強いところでの魔術の研究と管理、統制に当たる魔術教会が、なぜ……？
いや、しかし……だからこそネッドは確信した。ここに、“指輪”はあるはずだ。
ネッドの胸元で、ペンダントの石が鈍く光を発したように思えた。
「じゃあ、その宝庫に行けば、アニキの目的のものがあるかもしれないってわけだな」
「そういうことだ。タラ、その宝庫の場所は分かるか？」
「う、うん……でも、どうしてそんなに、その指輪ってのが見たいの？」
宝庫の場所を案内してもらうため身を翻したネッドは答えなかった。仕方なく、タラもそれ以上は聞かずに、先導して彼らを案内する。と――ネッドが、道中でタラに答えた。
「あれが……全ての始まりだからさ」
小さく呟かれたその声は、深い遺恨や憎悪を宿しているようだった。そしてタラは……その声に、どこか泣き叫ぶ少年の哀しさを垣間見た気がした。
それほどまでに彼の追い求める指輪とは一体……？
タラが横の雇われ魔術師について思考していたそのとき。突然、悲鳴のような叫び声とともに地下から爆発音が鳴り響いた。

０４（後書き）

プロットに修正を加えないといけないかなぁ。
ちょっと当初の予定から外れてきてる気がします。

05

幸いと言うべきか。
爆発が聞こえたときには、宝庫への隠し階段はすぐそこだった。タラが本棚に収められたとある一冊を押し込むと、棚そのものが横にずれて階段が顔を出す。すぐに、そこをひた走って降りていった。
見えたのは粉塵だ。恐らくは爆発によるものだろう。宝庫の入り口にたどり着くと、壁や床の瓦礫に囲まれて一人の男が倒れていた。この家の主人――オルベルだ。
「お父様！」
彼に気づいたタラが、いち早く駆け寄って具合を確かめる。爆発に巻き込まれて傷ついたオルベルは、外傷を多数走らせて気を失っていた。しかし、運よく致命傷となるようなものはない。
「大丈夫だ。大きな怪我はしていない」
今にも泣き出しそうな顔をしていたタラは、ネッドにそう言われてとりあえず安堵した。
「だが、このままここにいると危険だ……安全な場所まで連れて行け」
強く、有無を言わさぬ語調。タラは何か言おうと口を開閉させていた。しかし、言う言葉が見当たらなかったのか、素直に頷くに落ち着いた。
「オーリー、お前も一緒に行くんだ」
「で、でも、アニキ……」
「いいから行け！」
ネッドの気迫に、それ以上オーリーは言い返すことは出来なかった。事は深刻なのだと、理解できたからだ。黙って頷くと、彼はオルベルを背中に背負って、タラとともに階段を上っていった。後に残されたのは、ネッド一人だ。
彼は宝庫へと足を踏み入れた。わずかに粉塵が晴れて、中の様子

が確認できる。＞古き国家＜時代の魔術文字を組み込んで作られた剣や、一種の体系理論を記した古文書。それに秘文魔術が刻まれた石版まで壁にかけられているのを見た。確かに……宝庫というにふさわしい。

やがて粉塵は消えてゆく。爆発は、宝庫の奥の壁を破壊したものなのだろう――月夜の光を背景にして、一人の男が悠然と立っていた。

「ヴェクサシオン……！」

男の顔を見て、ネッドは信じられぬものを見たような表情になった。しかし、すぐにその表情は、歯軋りを抑えきれないほどの憤怒へと変わる。

男はそんなネッドの双眸を、冷笑して見つめていた。

そいつは、一言で言えば神秘さに満ちていた。年齢は顔立ちからしてネッドと同様ぐらいに見えるが、月夜の明かりに銀光を映し出す美麗な銀髪はひときわ輝いており、聖霊か妖精かと見紛うほどの異貌さを携えている。紬糸のように靡く銀髪の下の顔立ちは、壮麗にして怜悧なものだ。闇色のマントが対比となって、その白き肌を更に映えさせていた。

変わらぬ。変わらぬ姿だ……。確かに成長を遂げてはいるが、奴の纏う隔絶された雰囲気は、あの時から一切変わってはいない。銅像のように不気味に立ち尽くして、こちらを見下ろす、その表情さえも……！

しばらく何も語らなかった銀光の男は、やがて口を開いた。

「久しぶりだな、ネッド」

「ああ、久しぶりだ、ヴェクサシオン」

「……昔のように、ヴェイクと呼んでもらったほうが僕としては嬉しいんだがね」

「そうかい。でも……今となっちゃそうもいかねぇだろ？」

互いの言葉が交わされる間も、神経と思考は戦闘態勢を取っていた。周囲に漂う魔力の根粒。それを感じ取り、音階を調べる。

ヴェクサシオンはかすかに笑った。
「確かに、今となってはな。……いや、君と会って凄く嬉しいのでね。つい昔を思い出してしまった」
「昔か。それがもし五年前のものだとしたら、俺は思い出したくはないがな」
二人は沈黙、そして睨み合った。
「あの主人には悪いことをしたな。この爆撃は魔術を使ったわけじゃないんでね。威力の加減が難しくて、つい巻き込んでしまった」
「そうか」
ネッドは憮然とした態度で吐き捨てた。
「ところでネッド――コンダクターの指輪はどこだい？」
ついに切り出された本題に、ネッドはわずかに焦りを感じた。指輪はすでに奴の手の中にあると思っていたが、違うのか？
「やっぱり……それが目的か」
質問に答える形にはならないが、時間稼ぎも含めてネッドは応じた。銀光が揺らめく。
「ああ。……しかし、宝庫にあると思ってやって来たのはいいが、どうやらここにはないらしい。君ならば、知っているのではないかと思って……な」
最後の言葉は、別離への挨拶に過ぎなかった。
飛来した白刃の先端はネッドの顔面を狙っている。鼻先に迫ったそれをかろうじて避けて、ネッドは体勢を取り直す。先陣を切ったナイフはそのまま壁に突き立った。
マントの下に隠していた代物か。恐らく、神経を研ぎ澄ましたままでなかったらすでに命はなかっただろう。
「奏でよ」
気づいたときには、ヴェクサシオンは魔力を紡いでいた。文言が囁かれるとともに、宝庫を漂っていた魔力が集約してゆく。その過程に生み出されるのは、魔力同士が触れ合い、離れ、宙を舞ったときの澄んだ音色だ。

先手を取られたことに舌打ちをする間もなく、ヴェクサシオンの手のひらがネッドを捉えた。
「革命のエチュード！」
穏やかだった曲調が激しく波打つ。そして、魔力によって生み出された衝撃波は、そのまま音色を引きずってネッドへと撃ち込まれた。
床や壁を吹き飛ばし、瓦礫が散乱していた宝庫内を激しい竜巻が破砕してゆく。宝庫の入り口は完全に元の形を失い、ただの大穴になってしまった。
ネッドは宝庫の外で瓦礫に埋まりかけていたが、すぐに立ち上がった。寸前で魔力を集めたのが功を奏した。大きな怪我はない。しかし、体中に傷が走って節々を痛めつけた。
「ネッド！　指輪がどこにあるのか答えろ！　そうすれば、命は助けてやる！」
宝庫の奥――粉塵に隠れてヴェクサシオンが告げた。
奴は、俺が指輪を持っていると思っている？　自分でさえもどこにあるのか分からないネッドにとってそれは好都合であったが、このままやられてはどうしようもない。どうする？
「……知りたけりゃ、俺を倒してみるしかないな！」
ネッドは、挑発とともに片手をヴェクサシオンへ向けて突き出した。魔力が徐々に集約してゆく。浮き立つ援軍の心持ちにも似た、躍動感のある音階だった。
「革命のエチュード！」
「魔弾の射手！」
宝庫内よりヴェクサシオン。
衝撃波が起こした風圧に、魔力の弾丸が風穴を空けた。光の弾丸はそのままヴェクサシオンへと一直線に飛び――直撃する。
「ぐっ……！」
ヴェクサシオンの苦鳴を聞いて、ネッドはすぐに次なる魔力を紡いだ。音階を変えて、曲調を変化させる。それまで、触れるだけで

も熱気を放っていた光の魔力は、穏やかな鈍色になった。
「奏でよ……月の光！」
鈍色の魔力がネッドの目の前に広がったと思ったとき、それは不可視の障壁となった。衝撃波がネッドに襲い掛かったが、障壁はそれを弾いて内側の空間を守る。衝撃波が弾かれる度に、オルゴールにも似た甲高い音が鳴った。
衝撃波が収まったのを確認して障壁を解くと、ネッドは宝庫内に再び足を踏み入れた。と――まるでそれを待っていたのかのように、すぐ隣で囁かれるような声が聞こえた。
「真夏の夜の夢……」
魔術だ。すでに紡がれていた魔力の気配に気づいたときには、もう遅かった。粉塵が消えた後に、六体の人影――ヴェクサシオンが立っていた。
「幻影魔術……！」
「懐かしいだろ？　……どれが本物か、お前に分かるか？」
六体のヴェクサシオンが同時に口を開いた。
ネッドの脳裏に過去の情景が過ぎる。……幼い彼とヴェクサシオン、そして、幻影魔術で六体に増えた愛すべき人が、混乱して戸惑う自分たちを見て楽しそうに笑っていた。
くそっ……！　ふざけやがって！
衣擦れの音がした。とっさに避けたネッドの目の前をナイフを構えたヴェクサシオンが過ぎ去る。続けざまに、ヴェクサシオンたちがナイフで一気に切りかかってきた。必死でそれを避けるネッドだが、このままではいずれは体力が尽きるのは必至だ。
飛び退り、ヴェクサシオンたちから距離をとるネッド。指先に、魔力を集中させた。
「剣の舞！」
転瞬――指先の魔力が赤く発光したと思ったとき、魔力はそのまま赤き光を帯びた剣を生み出してた。手の中に納まった魔力の剣で、ネッドはヴェクサシオンたちに立ち向かう。迫るナイフの数々を打

ち払い、なんとか……二体は切り屠った。無論――それでもヴェクサシオンの魔術が解かれたわけではない。すぐに二体の幻影は再生される。

だが……六体を相手にするよりも、はるかに時間は稼げる。ネッドはナイフを払って再び飛び退ると、敵が迫るよりも先に最大限の魔力を紡いだ。

「世の終わりのための……四重奏曲！」

幻影を消滅させる解法魔術。魔力の剣は消えるが、その代わりに宝庫内の魔力たちは四重奏曲の壮大な音色を奏でた。音色の一つ一つがそれぞれに繋がりあい、一つの空間を作り上げる。

ヴェクサシオンは魔力を紡いでいるネッドを先に仕留めようと迫るが――遅い。すでに空間は生み出された。

パリンッ――ガラスが割れるような甲高い音が鳴ったと思ったとき、宝庫内の全ての魔力が浄化されていた。空間は割れて、魔力は宙に雫のようになって飛び散っている。当然、ヴェクサシオンの魔術も解かれたはずだ。

だが……銀光は影も形も残されていなかった。

「逃げられたか……」

恐らく、解法魔術が完成する寸前に幻影を解いた彼は、移送魔術を紡いだのだろう。その詠唱速度もさることながら、とっさの判断力も驚嘆させられる。

さすがに――天才と呼ばれただけはあるか。

ネッドは疲弊した身体を支えきれなくなって、その場に腰を落とした。噛み合った歯の奥から、呻くような声が漏れる。ようやく見つけた。見つけたというのに……！

「くそ……！」

崩壊した宝庫内でただ、ネッドの行き場をなくした歯がゆい思いだけが、さまようように吐き出された。今頃になって……精神的にも、肉体的にも疲労が襲ってくる。意識が、徐々に薄れてきた。

そのまま――彼が気を失うまでは、そう時間はかからなかった。

０５（後書き）

少しでも“面白い”と言っていただけたら、これ幸いです。

※２０１１／０６／１２　「三年前」の記述を「五年前」に変更しました。

06

アイネ・クライネの顔は美しかった。

まるでどこかの彫刻家が彫り上げた氷像のような姿。二度と動くことのないその肉体にこしらえられた眠りの表情は、安らかであった。

だが同時に、ネッドは痛感させられた。彼女は二度と動かない。口を聞くことも。あの、いつもネッドをからかって楽しそうに笑っていた笑顔も、二度と見ることはない。ネッドはただそれだけは確かなものとして理解できていた。

『コンダクター』。アイネはそう呼ばれていた。それは、最強にして唯一無二の存在に与えられる魔術師の称号だった。“指揮者”はその名の通り、幾多もの魔術という名の演奏家を操り、一つの楽団を作り上げる。その名を冠する者は、魔術教会においてただ一人――アイネにのみ許されていたのだ。

ネッド……そしてヴェクサシオンが彼女に拾われたのは確か、１０を過ぎようかという年頃の頃だっただろうか。かつて魔術教会が参加した大戦の最中に、二人は拾われたのだ。両親の顔を覚えてはいない。二人が生きてきたのは、絶えず紛争が起こっている荒んだ辺境大陸だ。子供とはいえ、一人で生きていく術を学ばねばならない。ヴェクサシオンもネッドも、そうして生きてきた戦災孤児の一人に過ぎなかったのだ。

アイネはそんな二人を引き取り、自分の子供のように育ててくれた。魔術の基礎を教えてくれたのも彼女だ。１２歳になってからは魔術教会で学ぶこととなったが、その後もアイネは自分たちの修行によく付き合ってくれていた。姉として、母として、そして師匠として。

ネッドはそんなアイネを誇りに思っていた。『コンダクター』の名を冠する最強の魔術師に魔術を教えてもらえるという幸運。もち

ろん、例えそんな称号がなくとも、アイネを親に持ったことをネッドは誇りに思っていただろうが、それがネッドにとって憧れの意味も含んでいたことは間違いなかった。
だが……今思えば彼女は、なぜかそのことを喜々として話すネッドを、どこか哀しげな瞳で見ていたような気がする。それは、なぜだったのだろうか？　その答えを聞くことは、もう出来ない。
棺の中に納められた彼女を、ネッドは悄然とした瞳のまま見つめていた。
シベリウス大聖堂――魔術教会の中でも中心的なこの大聖堂で、アイネ・クライネの葬式は物々しく行われた。頭上高くそびえるステンドグラスには、魔術の創始者と呼ばれるモーヴェンの姿が神々しく描かれている。気品溢れる白髪の老人の姿は、雄大な光を瞳に湛えており、幻想的でもある。まるでその幻想性を表現するかのような音楽が、アイネを見送るべく静かに流れていた。
式には、魔術教会を担う様々な魔術師たちが出席していた。主たるものは『シンフォニー』の老人たちであろう。『シンフォニー』とは、魔術協会の主幹を務める魔術師のことだ。知見と見聞に長け、膨大な知識と実力を兼ね備えていることがその資格だと言われ、結果的に経験と知識を重んじられるわけだが――ネッドからすれば、要するに魔術師の中でもエリート街道を歩んできた生き字引といったところだ。あるいは死に遅れと言ってもいい。中には真に優秀たる魔術師もいるが、そのほとんどは地位と権力にしがみつく老いぼればかりだ。
モーヴェンのステンドグラスが見下ろす袂で、美しい鮮やかな花を添えられるアイネの棺。列を成した長椅子に座りながら、それを見つめていたネッドの後ろで、シンフォニーの老人たちがなにやらしわがれた声で話をしていた。
「一体どうしたことだ。彼女が亡くなったのは、彼女の引き取った孤児、ヴェクサシオンのせいと言うじゃないか」
「これは由々しき事態だぞ。もしもこの事が世俗諸侯に漏れたら、

魔術協会の、いや、魔術師全体の地位が危険にさらされる。たかだか子供に、コンダクターが殺されたのだぞ」
「だが、どう――」
「ここは――」
「ヴェクサシオンとネッドを――」
聞く気が薄れてきた。
分かっていたことだ。『シンフォニー』たちの言うとおり、もしもこの事が世俗諸侯たちに漏れてしまったら、魔術教会自体の地位も危ういものとなるだろう。そもそもが、魔術教会はいまだ新興組織の域を出ていないのだ。魔術教会がその手を拡大させているこのルーベルグ大陸でさえ、いまだ魔術師を忌み嫌う者は少なくない。王国＞ブランドベル＜はともかく、ブランドベルの地位も狙う他勢力の国家は、これを機に魔術師たちの陥落を企てるかもしれなかった。
たかが子供二人と魔術教会の地位を天秤にかければ、シンフォニーたちがどちらを選ぶかは目に見えていたのである。そして、その望まぬ期待を裏切らず、シンフォニーたちは保身へと動き始めようとしていた。
――だが、構わない。
ネッドの意識にあるのは、ただ一つだった。その目的に比べれば、そんなことなど些細なことだ。
俯き加減に考え込んでいたネッドに声がかかったのは、そのときだった。
「ネッド」
ゆっくりと、顔をあげる。彼を呼んだのは、一人の壮年だった。年の頃は５０代後半といったところか。白髪混じりの黒髪の下で、温和な顔が彼を見下ろしている。
ネッドは焦燥の念に駆られていた自分を落ち着かせた、その声色の主の名を呟いた。
「……ワーグナー神父」

このシベリウス大聖堂の神父を務める、魔術教会の中でもベテランの魔術師だった。そして彼は、アイネの師でもある。彼女が魔術教会の課程を終えた後も、深い交流を持っていた神父だ。ネッドにとっても……信頼のおける魔術師だった。

「一体どうした？　怖い顔をして」

まるで孫に向けてほほ笑むのような温和な表情。

「いえ……」

頭を振って答えるネッド。シンフォニーたちと良い勝負と言える年齢ながらも、いまだに現役の魔術師である神父は、まるで彼の意識を見透かしたように言った。

「ヴェクサシオンのことか」

一瞬、否定の言葉が喉まで差しかかる。だが、彼に嘘をつく必要もあるまい。それに彼には、もうとうにわかっていることだった。

「……はい」

「彼女が……孤児であった君たちを引き取ってきたときは、私も心の底から驚いたものだ。なにせ、突然のことだったからな。大戦を終えて帰ってきた彼女の横に、君たち二人が寄り添っていた」

「あのときは……異国にやって来た不安のほうが強かったです」

「はは……私も、君たちには怯えられていたな。しかし、なんというか……。私はあのとき、ほっとしたのだよ」

不思議そうに見返したネッドに、ワーグナーは続けた。

「コンダクターの称号を手にした頃からだろうか。奏言魔術の隋を極めた彼女はいつも……どこか寂しそうな目をしていた。弟子たちの育成に精を出しながらも、彼女の心はまるですがるものをなくした子供のようなものだったのかもしれない」

そのときの事を目の前にしているかのように、思い起こしながら話すワーグナー。

「あのときの彼女は、とても嬉しそうに笑って君たちを連れてきたよ。彼女にとって、君たちは子であり、宝であり、彼女自身が見出すことの出来た希望だったのかもしれないな。そのときは、このよ

うな最後を遂げるとは思っていなかったのだが」
「それは……僕も同じです」
ぐっと、ネッドは手のひらの肉に食い込むほどに拳を握り、怒りをかみ締めた。憎悪は尽きない。消えた親友の姿が、今も脳裏に焼きついている。
「シンフォニーたちは……いや、魔術教会は、君たちを処分することを考えている。正確に言えば、魔術教会からの追放だ。ヴェクサシオンについては、これ以上の被害が教会に及ばない限り、こちらから動くことはあるまい。君は……どうする？」
「……」
ネッドはしばらく閉口していた。思考を巡らせていたせいでもあったが、結局――答えは一つだった。
「僕は、ヴェクサシオンを探します」
「アイネの復讐かね？」
「……」
無言で、ネッドは力強く頷いた。復讐は憎しみしか生まない。そんな教えを告げるようなつもりは毛頭なかった。そうでなくとも……少年の瞳に湛えられた哀しみの光を見て、ワーグナーはそれ以上口を開くことはできなかった。
二人は棺を見ていた。そして、ネッドは気づく。まるで、彼女の最後を見届けるかのように、魔力の光が漂っていることを。ステンドグラスからの明かりと反射しあったそれは、壮麗で美しい。
気づけば――彼女を送り出す葬送歌は、魔力の音階へとその役目を任せていた。

07

――アニキ――アニキッ！

葬送歌が聞こえなくなる頃、その声は不意に聞こえてきた。暗闇の中で反響する声に驚き、はっとなって目を開ける。それまでの暗闇の世界から一転して、視界の色が差し込んできた。

目の前には、心配そうにこちらを見下ろしているオーリーとタラの姿があった。

「アニキ、やっと目を覚ましたか」

「よかったぁ……」

安堵の息をつく二人。ぼんやりと身体を起こして、そこでようやくネッドは、自分がソファーの上に寝かされていることに気付いた。横では、膝をついているダズベリー夫人――マメールもいる。

救急箱を閉じているところを見ると、治療してくれたのか。よく見れば、身体も包帯が巻かれている。

ネッドの視線に気づいて、マメールが柔らかくほほ笑んだ。

「大事には至っていなかったようです。よかった」

そうか。俺は、ヴェウサシオンを逃がして、そのまま……。

わずかに呻きをあげながら、ネッドはソファーに座り直した。深手は負っていない。所々の軽傷が痛む程度だ。ヴェクサシオンと戦ってそれで済んだのであれば、あるいはそれも幸運なのかもしれない。だが、ネッドにとっては……。

「くっ……そ……！」

苛立つままに拳を握り、膝を打つ。

そんなネッドを、オーリーたちは黙ったまま見つめていた。なにか声をかけようかとも思い口を開閉するが、事情も知らぬままではかける言葉も見つからない。すると、そんな彼らの間から声が発せられた。

「ヴェクサシオン・クライネか……目的は、コンダクターかね？」

「！？」
ハッとなって、ネッドは顔をあげた。視線の先にいたのは、このダズベリー家の主であった。オルベルの腕は肩からさがった包帯で固定されている。どうやら、爆発に巻き込まれたときに負傷したもののようだ。
それを見たとき、ネッドの目がわずかに沈んだ。申し訳なさそうな彼の目を見て、オルベルは大したこともなさそうに苦笑した。
「気にすることはない。アイネ様よりコンダクターの証を預かったときから、こうなることは覚悟できていた。しかし……それがあのヴェクサシオンであるとは予想できなかったが」
「あなたは……なぜ……？」
「私のことよりも、君は……全てを話してくれるのかね？」
オルベルの瞳が細められ、ネッドを見据えた。
同時にネッドは、オーリーたちの視線も自分に集中していることに気づいた。
「ん……あー、その……だな」
口から洩れるのは詰まった言葉の端々だけだ。
「ネッド」
オーリーとタラがそれぞれにじと、とした目を向けた。どうしたものかと思案を巡らせるが、いずれにしても、彼らの非難めいた視線から逃れられるはずもなく、これ以上は誤魔化しようもない。それに、すでに巻き込んでしまった身だ。事情は確かに、話しておくべきか。
「分かった、話すよ」
嘆息一つこぼして、ネッドは己が過去の断片を語り始めた。
それでも、余計なことをしゃべるつもりはない。必要なことだけに留めたのは、わずかな警戒心と自尊心が、それを阻んだからだ。
ヴェクサシオンという男が、『コンダクター』の証を狙っていること。そして、それを未然に防ぐことを目的として、自分がこの屋敷にやってきたこと。おおむね、それらの話をしているとき――オ

ーリーがとある単語に反応した。
「コンダクター！？」
「なに、そのコンダクターって？」
対して、きょとんとした顔でオーリーに問いかけたのはタラだった。
「そんなことも知らないのかよ、タラ」
オーリーとしては驚いただけかもしれないが、半ば馬鹿にしたような言葉にタラの顔が『うるさい』という言葉を告げるべく魔物のように歪む。恐怖に打ち震え、オーリーはおずおずと説明に取りかかった。
「コンダクターってのは、魔術師――アイネ・クライネにのみ贈られた称号だよ。いわゆる『最強の証』って言われてて、魔術協会でも類を見ない奏言魔術の使い手である彼女の魔術は、技能も力も、その右に出る者はいないって話だ。だからこそ、教会はそんな彼女の実力に敬意と尊敬を認める『コンダクター』の称号を与えた。その比類なき魔術奏者に、畏怖さえも込めてね」
オーリーの重々しい語り口に、わずかにタラは怖じ気づいたようだった。そんな語りを継ぐようにして、ネッドが言う。
「それも五年前までのことだ。アイネは亡くなり、コンダクターの称号はただ一人の功績として消えうせた。比類なき魔術奏者は名誉ある死を迎えたとして、教会の歴史に名を連ねてな。ま……それはともかく、だ。あのヴェクサシオンってやつは、そのコンダクターの証を探してるのさ」
タラは合点がいったように頷いた。そして、それを未然に食い止めようとネッドがやって来たが、遅かったということか。
が、そこで……彼女はふと思い至る。
「ちょ、ちょっと待ってよ……でも、なんでそんな奴が、『コンダクターの証』なんてものを探して、うちを襲ってくるわけ？」
「それは……こういうことだ」
タラの疑問に答えたのは、ネッドでもオーリーでもなく、己が父

だった。オルベルは今の壁に飾ってある鹿の頭を象ったランプに近づいた。そして、懐から何やら小さな赤き球を取り出す。鹿の双眸の片方からはめ込まれているガラス玉を抜くと、代わりに、オルベルはその小さな赤き球をそこに埋めた。

すると――突如、鹿の双眸が光を発し、その場から下へとずり落ちた。自分たちがこれまで過ごしてきた居間にこのような仕掛けがあったことにタラは茫然としているが、どうやらマメールはすでに知っていたようで、険しく眉をひそめながらも驚きの顔にはならなかった。

そこにあったのは、小さな指輪だった。銀がわずかな石を挟んで輪を結んでいるだけの、指輪として見ればシンプルな造りだ。翠玉色を思わせる碧と蒼を混ぜ合わせたような幻想的な色合いの石。それを見て、まず血相を変えたのはネッドだった。

「コンダクターの……指輪……！？」

情報ではこの屋敷にあることを知っていたが、現物を目の前にして、彼は思わず腰を浮かす。タラやオーリーも同様に驚いているが、彼らにとっては、どうやら現実感のなさに呆然とするのが先のようだった。

タラが、父へと尋ねる。

「どうして……そんなものがここに……？」

「これは〈古き国家〉時代の産物でもあってな。元々、この指輪を作りだしたのは私だ。魔術協会からの依頼を受けて、古の時代の指輪を再生したのだ」

そうか。だから、彼は魔術協会に何度か出入りしていたというわけか。ネッドの過去の記憶が、それと重なった。

「だが……あいにくとこれがアイネ様の指に収まっていたのは数日だけだ。もともと、コンダクターの称号授与式のときだけの形式的な意味合いも大きかったのでな。彼女から直々にこちらに返品をいただいたよ」

アイネが称号授与式から幾日か経って、指輪を外していたことは

知っていたが……それがここにあるとは思わなかった。てっきり、何らかの裏ルートをわたってこちらにたどり着いたとばかり思っていたのだが。
　早々にそのことに気付けなかったことに、少しばかり後悔と苛立ちを感じる。そのときだった。オルベルが、指輪を手にしてネッドに穏やかにほほ笑んだ。
「だから私は……君のことも知っていたよ、ネッド君」
「俺の……ことを？」
「アイネ様からよくお聞きしていた。君と……そしてヴェクサシオン君のことも。二人とも自分にはもったいないぐらいの子供たちだと、彼女は嬉しそうに語っていたよ」
　アイネの笑顔を思いだして、嬉しさと、そして少しだけ物哀しさを覚える。彼女の優しさ、彼女の声……全てがもう、消えてしまったものだ。そして、そんな風に嬉しそうに語っていたという、ヴェクサシオンと俺はいま……。
「別に騙すつもりはなかったのだがね。君の目的がこのコンダクターの指輪であることはどことなく予想できた。だがまさか……襲ってきたのが彼とは思わなかったが」
「……すみません」
「君が謝ることはない」
　ネッドを安心させようとしてか、優しそうにオルベルは口元を緩めた。そして、指輪をネッドの目の前に差し出す。
「いずれにせよこれは……君の手にあったほうが良い物のようだ」
「ですが……」
「いつまた、ヴェクサシオンが襲ってくるとも限らない。次こそは、このような仕掛けで騙し通せるとも思えないだろう？」
「……」
　その指輪がほのかに発する高尚な雰囲気に、少しばかりネッドは躊躇した。それは、これが元々はオルベルがアイネ自身から預かったものということもあったのだろう。

だが、自分がここにやって来た理由は、このアイネの形見を手に入れることだった。そして、それを狙うヴェクサシオンの手から、守ってみせること。無論――その前に、やるべきことは残っているが。オルベルはそれを、すでに見透かしているようだった。

ネッドは指輪を受け取った。

アイネの小指に合わせて作られたそれは、ネッドの手には、とても小さく見えた。

07（後書き）

※2011／06／12　「三年前」→「五年前」に変更しました。

08

魔術教会はルーベルグ大陸に領域を拡大しつつある。そしてそれは当然、トラバスタにもすでにその手が及んでいるということでもあった。

街の中心にあたる広場は、数々の店が構えられた憩いの場としての機能も果たしている。魔術教会トラバスタ支部は、そんな広場の空気に準じながらも、一定の隔絶された雰囲気を持ってそこにあった。

陰気な路地裏に構えられた傭兵ギルドとは違って、教会の支部は王宮騎士団のような市民の味方たる清きイメージを重んじている。存在を主張しすぎることなく、かといって忘却に置かれることもなく、社会構成の一部としての魔術師の地位を、魔術教会は構築しているのであった。

建物は、シンプルな作りの石造建築だった。扉の上に掲げられた看板には「魔術教会トラバスタ支部」の文字がルーベルグの公用語で古めかしく描かれている。

看板の前には、かつてその魔術教会から追放された魔術師が立っていた。が、なにやら疲れたような表情をしている。じと……と隣を横目で見て、彼は嘆息のため息をついた。

「で……なんでお前らがここについてくるんだよ」

「なんでって……決まってるじゃない。その指輪はわたしのなんだから、所有者が所有物を案じて同行するのは当然のことでしょう？」

金髪碧眼の少女が、逆にネッドを呆れて見下げるように、胸を張って答えた。その隣にいる情報屋の少年は、自分ではどうにもできなかったというようにネッドに苦笑してみせている。

「あのなぁ……これは俺がお前の親父さんから譲ってもらったんだぜ？」

「お父様のものはいずれわたしのものになる予定だったのよ！　だ

ったら、わたしの許可も必要なのは当たり前でしょ！　わたしはあんたに指輪を渡すなんて認めてないもの！」
無茶苦茶な理屈であったが、どうやらそれを本気で思っているところが、この少女のすごいところだった。オーリーがネッドを同情してか、彼女の肩を掴んでまあまあと和ませようとしているが、即座に右エルボーが頬へとめり込んだ。
そんな彼女たちに、ネッドは言う。
「いいか。この建物の中は魔術師以外は入れないように厳重に警備されてるんだ。頼むから、無理やり踏み込んできて迷惑をかけるようなことはするなよ！　いいか！　お、と、な、し、く、待ってるんだ！」
最後の言葉だけは念を押して伝える。だが、タラは地団駄を踏んで憤慨した。
「なんでよー！　どうせその指輪に関することなんでしょ！　だったら相続的にわたしも関係者じゃないのっ！　どーして入っちゃいけないのよ！　それにネッドだって魔術教会から追放――」
「だあああぁぁ！」
あわててネッドはタラの口を押さえた。
そもそも追放魔術師というのは、追放される何らかの理由があってこそ成り立つものである。そしておおよそ、その理由というのは、犯罪を犯したなどの風評の悪いものが最も多い要因だ。そういった経緯から、あまり口外するのはよろしくないのである。
口をふさがれてもなお、タラは喚き散らしている。
「もがもがもがもがー！！」
「分かった、分かった！　とにかく、指輪はこの問題が終わったら返してやる。だから頼むから大人しくしてくれ。オーリー、お前も頼むぞ。……主にこいつのことを」
「うえ……」
あからさまに嫌そうな顔をするオーリーにタラを押しつけて、ネッドはようやく建物の中へと入っていった。背中からは、ぎゃーぎ

ゃーといまだに文句を言い続けているタラの声と、オーリーが殴られたのであろう痛々しい殴打音が聞こえてきた。
彼に同情の念を送って、ネッドは散々ついてきたため息をいま一度吐き出した。

09

支部の中へと入ってネッドがまず思ったことは、想像していたよりも内部は冷厳な雰囲気に満ちているということだった。外壁は外部からの魔物や襲撃者を防ぐために頑丈な石造りであったが、内部のそれは物理的な要素よりも魔力的効力が重視されているようだった。

壁に刻まれた古代文字や魔術印の配置は、自然な魔力の回流を邪魔しない程度に音階を刻んでおり、静かな背景曲がオルゴールのそれのようにわずかに聞こえていた。同時にそれは、隣接する広場の騒がしさを断ち切っている。

外の喧騒から別世界に来たような錯覚に陥るのは、おそらく支部の中が静けさを孕んでいるからでもあるのだろう。一階には受付のような席とわずかな仕事場。二階へと続く階段も見受けられる。その奥で何をしているかは分からないが、かつて話に聞いたところによると事務的仕事が行われているらしい。

「お待たせしました」

二階を見やっていたネッドに声をかけてきたのは、凛とした生真面目な雰囲気の女だった。支部の受付をしている彼女は、出来る限り客向きの柔らかい声を発するようにしてネッドを誘導した。と言っても、そもそも追放魔術師であるネッドを出迎えること自体、気が進まないのか……傍目からもあまり好感を持てるような態度ではなかったが。

いかにも事務的に、ネッドは一階の奥へと誘導された。扉を開くと、今度は入口以上に静けさを増した廊下へと続いている。二人の足音だけが響く中を歩いていくと、すぐにある部屋へとたどり着いた。

「こちらでお待ちください」

ネッドを部屋に通すと、女はそれだけを告げて部屋を出て行った。

さて……と辺りを見回す。さきほどまでよりかは遥かに、落ち着きのある雰囲気の部屋だった。おそらくは客間なのだろう。ソファーとテーブルに、先ほどの彼女が用意した紅茶。周りを囲むのは資料や本であったが、魔術師にとってそれらのものは嗜好品でもある。時間も持て余すということで、軽く近くにあった本棚の古書に手を触れたが――そのとき、静かに音色のようなものが背後で流れるのを感じ取った。

魔力の音階だ。通常の人間では感じ取れないほどの微細なそれを聞きとって、ネッドは振り返る。すると、床に印が描かれるところだった。赤き光の印はすぐに縁を結び、そこに一人の男が現れた。

「……久しいな、ネッド」

かつて魔術の教えを請うた師は、変わらぬ笑みでそこにいた。

多少、皺と白髪が増えたか。ネッドは手に取りかけた古書を元に戻して、改めて向き直った。

「ああ……ほんとに久しぶりだ、ワーグナー神父」

シベリウス大聖堂に所属する壮年の魔術師は、ネッドの返答に小気味良く唇の端を持ち上げた。そして、彼に席に座ることを促し、ソファーに座って対面する。久しぶりに会った教え子の成長した姿に、ワーグナーは嬉しそうに言った。

「それにしても……変わるものだな。あの頃はまだこんなに幼かったというのに」

「そこまではないっての」

ソファーに座ったまま手のひらを水平して示した身長は、せいぜい十歳かそこらの子供の身長だ。苦笑してみせるネッドと笑いあって、ワーグナーは紅茶を口に運んだ。

間が開く。ワーグナーは穏やかな笑みを浮かべたまま、そこに映る何かを見ようとしているかのよう紅茶の水面に目を落とした。

やがて、口を開く。

「君が私を訪ねてきたということは、ヴェクサシオンのことかね？」

「ああ」

隠す必要はなかった。それに、ワーグナーもそれに気付いていたからこそ、こうしてわざわざトラバスタまで移送魔術を使ってくれたのだ。決まった場所に正確に己の肉体を移送することはそう簡単なことではない。魔術教会の支部や大聖堂同士がわざわざ構築した高度の術式と高位なる術者が必要となる。

魔術教会を追放された自分が支部に連絡を頼みこもうとしただけでも前途多難かと思われた試みだったが、どうやらこの壮年はそれらをあの時から予期していたようだった。

そう――自分が魔術教会を出奔したあの時から。

「ヴェクサシオンがアイネを殺害したのが五年前か。思い返せば……時が経つのも早いものだな」

「大聖堂はどうしてるんだ？」

「なんてことはない。いつも通りなものだ。最近ではシンフォニーの連中がなにやらブランドベルとよく会談を行っているが……王宮仕えの魔術師が増えてきたことも、それに関連しているのかもしれんな」

「アイネが生きてたら……最高の王宮魔術師になってただろうな」

「最高で、そして大陸最強の……な」

ワーグナーが同意して、二人はお互いに遠い記憶の彼方に思いを馳せた。

くすりと、ワーグナーが笑う。

「だが……彼女は王宮魔術師にはならなかったな」

「あれだけ誘いが来てたってのにな。普通に考えたら、もったいない話だぜ」

ネッドも同じように微笑した。少し物哀しく、そして少し……誇らしげに。ぎゅっと、自分の胸にあるペンダントを握る。

「だけど……アイネらしくもある。あの人は、自由に生きてたから」

「そうだな」

ワーグナーは短く答えた。

過去に旅をするのはこれぐらいにしておこう。そんな意図が見え

た気がした。だから、ネッドも最後に紅茶をほんの少しだけすると、カップを戻して話を始めた。
「実は……『コンダクターの証』を手に入れた」
「なんだと……！？」
「これだ」
ネッドは懐から茶の布で出来た、小さな包みを取り出した。紐を引っ張ってその口を開くと、そこからカランとテーブルの上に出てきたのは、オルベルから譲り受けた指輪だった。
「これは……確かに」
最初は信じられなかったのか。指輪を確認して、オルベルは目を見開きながら茫然とつぶやいた。
「なんでも、ダズベリー家にアイネ自身が預けてたらしい」
「ダズベリー家に……！？　通りで……見つからぬはずだ」
「……探していてくれたのか？」
「ああ……多少はな。魔術教会としても、唯一の称号『コンダクター』に向けて造らせた特注の指輪だ。行方が分からぬまま放置しておくだけというわけにもいかなかったのだろう。だが、〈古き国家〉時代の遺跡から発掘された秘石とはえ、何に使うものなのかも、何のためのものなのかも分からなかった代物だ。ただのガラクタであるとも言える。そのようなものためにわざわざ労力を使うのも無駄だという判断でな。すぐに捜索は打ち切られたよ」
それも、致し方ないのかもしれなかった。アイネは指輪の行方を誰にも言っていなかったし、手掛かりとなるようなものも何もなかったのだから。
ワーグナーは自嘲するように苦い笑みを見せた。
「何らかの方法で巧妙に隠しているのだろうと考えていたが、深読み過ぎたのかもしれぬな。まさか、製作者のもとに返っていたとは」
思い至らなかったのだろう。あるいはそれも見越して、アイネはオルベルのもとに預けていたのかもしれなかったが。
「いずれにしても……とりあえずは安心、か」

ワーグナーは自分に言い聞かせたように頷いた。そんな彼に、指輪へと視線を落としていたネッドが顔を上げる。
「それで、実は一つ疑問があるんだ」
「疑問……？」
ワーグナーは予想していなかった言葉に、訝しそうに眉を寄せた。
部屋に満ちてきた不穏な空気は、冷め始めた紅茶のそれに似て、わずかな冷たさを滲ませていた。

10

「ったく……なんでわたしがこんなところで留守番なんてしてないといけないのよ。そもそも魔術教会の中で話があるったって、わたしたちを連れていっても良かったんじゃないの？　ま……チビでノロマなあんたがダメだったとしても、わたしは良いわよね。美少女で優雅な立ち振る舞い、それになんたって関係者なんだし」

「……おい」

なにやら好き勝手に文句を言い続ける目の前のお嬢様に対して、オーリーはさすがに聞き捨てならないセリフを耳にしたため、声を漏らした。

だが、どうやらお嬢様にとっては、それは些細なことようだった。オーリーを無視して、目の前のグラスに入ったストローをがしがしと氷に何度も突きたてながら、ぶつくさと続ける。

嘆息の息をついて、オーリーはそれ以上何も言うまいと諦めた。

二人がいるのは、魔術教会トラバスタ支部からさほど離れていない喫茶店の中だった。広場の憩いの場のようになっているようで、客入りもなかなかの店である。支部の入口が視認できるぐらいの位置にあることだし、オーリーたちにとっても都合のいい場所だった。

本音のところを言えば、オーリーは支部の目の前で待っていたかったところなのだが……じゃじゃ馬お嬢様はどうやらそれをお気に召さず、喉が渇いたと言いだす始末。仕方なく、オーリーはこうして広場の店ということで譲歩して、彼女と一緒に喉を潤している最中なのだ。

それにしても、よく口が動くものだと……耳に届くタラの喚きを聞き流しながら、オーリーは思った。思えば、幼いころからちっとも変わっていない。傍若無人のわがままっぷりも、どこかにネジ巻きでもついているのではないかと思うほどの喋りっぷりも。むしろ拍車がついたとさえ言えるか？

懐かしい気分にはなるが、少なくとも耳が痛いのは勘弁願いたい。かつてと同様に嘆きつかれたオーリーがそんなことを思っていると……突然、比喩ではなく本当に耳が痛くなった。
「聞いてるの、オーリー！？」
「いてててててっ！！　き、聞いてる！　聞いてるってのっ！」
彼の耳を引っ張りながら、タラが不機嫌に言い放つ。
「じゃあ返事ぐらいしなさいよ、ったく！」
「わーった！　わーったから、耳！　耳離してくれえぇッ！」
ようやく解放されて、オーリーは涙目になりながら赤くなった右耳を労わった。
なんで俺がこんな目に……。そんな声がオーリーの頭の中に浮かぶが、それを言ったところで改善は望めまい。悪ければ殴られるのがオチだ。
結論は決まった。触らぬ神に祟りなし――ウェイトレスが持ってきてくれたレモンスカッシュを飲みながら、オーリーはなるだけネッドが早く出てきてくれることを祈った。
そのときである。
――喫茶店の窓をぶち破って、黒い塊が飛び込んできた。
「！？」
塊は窓と一緒に周囲の壁さえも破壊したようだった。破片を打ち砕き、吹き飛ばし、粉砕する。衝撃に巻き込まれそうになった、ウェイトレスや客の悲鳴が響き渡る。壁をぶち破った黒い塊は、カウンターへとぶつかってようやく止まった。
飛び散ったカウンターの残骸。塊を前にして、腰を抜かしたマスターはあわあわと声にならない声を漏らしている。突然のことに、何が起こったのか分からない。悲鳴は茫然へと変化して、不気味なように静かになる。
黒い塊につながっていた鎖がぐん――と引っ張られたのはそのときだった。先ほど塊が破砕した穴から、身の丈がオーリーの二倍はあろうかという巨漢がのそっと顔を出した。黒い塊――太い棘のよ

うなものを備えた鉄球を担ぎあげて、男は身体に落ちてきた粉塵をはたき落とす。
どうやら、侵入者は巨漢一人ではない。巨漢以外にも、三人のチンピラ風の男たちが遅れてやって来た。
いや――一人は、違った。最も奥で身構えている男は、明らかに他の三人とは違った雰囲気を纏っていた。他の三人がチンピラなら、その男はどこか整然としていて身のこなしの気品を感じさせる。騎士や兵士のそれに、よく似ている気がした。
それに、戦いに慣れているのだろう。身体によく馴染んでいそうな皮の肩当てから、マントを纏っているが、その下にある手の動きは見えない。つまり、次の手が予測しにくいということだ。力を誇示するかのように鉄球を持ち上げて、下卑た笑い声をあげる巨漢とは、比べるまでもなかった。
「フン……しけた店だな。で……、ネッドとかいう野郎の連れってのはどこだ？」
「さあなぁ。風体なんかは知らされてないしよ」
巨漢が岩の怪物を思わせるならば、それに応じた男は痩せこけており、骸骨のそれのようだった。
対照的な二人の間で、ぼさぼさな髪に鉢巻きを巻いている男が笑う。
「ひゃはは。それじゃあ、どれが誰だかわかんねえじゃん」
「――笑いごとじゃない」
それを静かな声で一喝したのは、先ほどの剣士の装いをした男だった。男の眼の輝きだけは、他のチンピラとは明らかに違っていた。三人もまた、自分たちがこの男と実力そのものが違うと認識しているのだろう。素直に、悪ふざけは収まった。
そこまできて、オーリーは彼らにどこか見覚えがあると思った。同時に、状況を大体飲み込むことが出来る。
奴らは、傭兵だ。
それも、つい最近になってこの町に来たという、新参者たちだ。

確か、その内の巨漢はネッドともめ事を起こしていたか。どういう経緯かは分からないが、奴らの口からネッドという名前が出たということは、あの銀髪の魔術師が雇った連中ということだろう。
（また厄介なのが来たなあ。さて……どうしようか）
テーブルの下に身を隠して、思考錯誤を巡らせる。
途中、ちらりと巨漢の鉄球に目がいった。そこから、視線は次にカウンターの惨状へ移る。
（あんなもので攻撃されたら、それこそ潰れちまうよ）
思わず、ごくりと息を呑みこんだ。敵に見つかる前に、さっさとこの場をおさらばせねばと念を入れ直し、裏口から出ていこうと背を向ける。だが彼は、ふと思い出して振り返った。そういえば、タラは……？
と――
「ちょっと！　あんた達！」
チンピラたちのほうから聞き覚えのある声が聞こえたのは、そのときだった。
全く自分を悪びれるということのない、いっそ清々しいほどの快活な声。目をやるまでもなく確信を抱いて、オーリーは嘆きを通り越して呆れていた。
（あの馬鹿……！　なにやってんだよ！）
案の定、声の主はあの金髪じゃじゃ馬娘だった。
襲撃を仕掛けてきた男たちに対して、仁王立ちでビシッと指を突きつけている。
「店をこんなにメチャメチャにして、ただで済むと思ってんの！　ブランドベルの王立騎士団呼ぶわよ！　慰謝料でも請求してやるわ！　てゆーかその前に謝んなさい！　わたしのレモンスカッシュ台無しじゃないの！　さっさと謝んなさい！　今すぐ謝んなさい！　さあ謝んなさい！」
とにかく鬱憤が溜まっているようで、彼女は怒りの赴くままに喚いた。

よく見れば、確かに彼女の頼んだレモンスカッシュは、オーリーのものと一緒に床に転がっている。ごもっともと言えば、ごもっともな怒りである。――あくまでも、支払いがオーリーでなく彼女であれば、の話だが。

いまさら何を言っても無駄であろう。いま、裏口に向けてこそこそと動き出すと目立ってしまう可能性があると判断して、オーリーは再びテーブルに身を隠した。

同時に、剣士が一歩前に歩み出る。

「お前が、タラ・ダズベリーか？」

「それがどうしたのよ」

「なに――――本当にそうなのだとしたら、少し……痛い目にあってもらうというだけだ」

「へえ。この全国少女武闘チャンピオンのわたしに、喧嘩を売ろうっての？」

タラはゆっくりと構えを取った。

記憶の引き出しを探ると、タラは確かに、かつてそのような大会で優勝していた。様になっている構えを見て取るに、今でも武術をたしなんでいるのだろう。

「ふゃっはっは！　武闘チャンピオンか！　そりゃおもしれえ！」

「嬢ちゃん。そんなんで俺たちに勝てるとでも思ってるのか？」

巨漢とぼさぼさ髪が馬鹿にしたように大笑した。

軽くひねってやろうかと、そのような意思を瞳に宿す。タラは敵意むき出しのままでぎゅっと強く拳を握った。無言のまま、剣士が首で三人を促す。ここにきてようやくはっきりとしたが、やはりあの剣士が男たちの主格なのだろう。

「ふゃっはー！」

先に飛び出してきたのは、ぼさぼさ髪の男だった。手にはいつの間にか、大きめのナイフが逆手で握られている。それに対して、タラはわずかに身体を沈みこませた。

男は正面から襲いかかる。軽い、空を切る音。不気味に光を反射

していたナイフが、タラへ突き立てられた。
――かに思えたが、すでにそこには、彼女の姿はなかった。
「なっ！？」
男は、驚愕して思わず声を洩らす。
タラは男の背後に回り込んでいた。優雅なる金髪を翻して、身体を半回転させている。華麗に開いたワンピースがパラソルのように広がって、中にある何やらお花畑的なものが見えた。
「おりゃあっ！」
タラはまるで男のような掛け声を出すと、右足を蹴り上げ、男の後頭部に強烈なローキックを放った。まるで骨が粉砕されたような音が鳴って、男はそのままカウンターの奥までぶっ飛ぶ。もしかしたら、本当に頭の骨が粉砕しているかもしれないと思うほどの勢いだった。
「どう？　……まだやる？」
蹴り飛ばした男を見送ると、タラは再び戦闘態勢を取って、挑発的な態度で残り三人の男たちに言い放った。
「この……！　くそアマ！」
鉄球を担いだ巨漢と、長剣を構えた骨男が二人一緒に身を乗り出した。
（うああぁ……お、俺は知らないぞ……！　……俺は一切知らないからな！）
事がどんどんやばい方向に回りだしているのを感じながら、オーリーは心の中で無関係を主張する。
だが、何を思ったか。
しばらく黙って構えを取ったままだったタラは、くるっと身を翻すと、ツカツカと一直線に歩いてきてオーリーのその腕を掴んだ。
「げぇ……ッ！？　お、おい、一体なんだってんだよ……おいっ！」
「いいから来なさい！」
せっかく身を隠していたというのに、これでは全く意味がない。
それでもなんとか抵抗を続けるオーリーを引っ張るタラを、男た

ちは困惑して見つめていた。そして、ようやく元の位置まで戻ってきて、タラはビシッと再び指を突き出した。
「さあ行きなさい！　あの猛獣どもを倒すのよ！　我がしもべ一号！」
「ちょっとまてっ！？」
間髪いれずにオーリーは叫んだ。
「どーゆーことだよっ！　説明が欲しいよ説明がっ！　いや、もちろん説明なんてされても意味は分からないと思いますけど！　――そもそもしもべ一号ってなんだ！？」
「そのままの意味に決まってるじゃない」
「決まってない！」
いつの間にか呼び名が決まっていることに憤慨する。しかし、相変わらずというべきか。タラはまったく悪びれる様子はなかった。
「この世に犠牲はつきもの……それは誰かを守るためには、仕方のないことなの。ということで、頑張ってね、しもべ一号」
笑顔で、ぽんっとオーリーの肩を叩くタラ。
「嫌じゃー！　――ていうか、犠牲って言っちゃってるじゃん！？」
「なによ！　じゃああんた、わたしにあんないかにも危なそうな男どもと戦えっての！」
「さっきは戦ってたじゃねえかよ！」
それもう、見事な戦いっぷりであった。
しかも、こっちがまったく望んでいないというのにだ。
「さっきは内心、刃物なんて使うとは思ってなかったのよ！　刃物よ刃物！　刺さったらどばーって血が出るのよ！　乙女の血は高く付くって言葉をあんたは知らないの！」
「初耳だし、そんな言葉はねぇ！」
ギャースカギャースカ言い合う二人。
そんな二人の口論を目の前にしながら――男たちはどちらを先に倒すかを相談していた。

１０（後書き）

ちょっと更新が遅くなってしまいました（苦笑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6319q/

コンダクター

2011年7月14日03時27分発行